

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 岩本 剛

本論文は、近現代の文学、思想、哲学に大きな影響を与えた批評家ヴァルター・ベンヤミン (Walter Benjamin, 1892-1940) の中期の散文作品『一方通行路』(1928) を中心にして、1920年代のエッセイ、書評、書簡を、適宜、参照しつつ、彼の前期から後期にいたる思想の展開を跡づけたものである。

筆者は、第一次世界大戦後の初期ヴァイマル共和国におけるドイツの政治社会状況が、アカデミックな世界に地歩を獲得しようとするエリート知識人としてのベンヤミンの自己規定を揺るがせ、ひいては彼をファシズムとの対峙、 Kommunismus にたいする関心へと導いたことを指摘する。その契機となったのが、1924年のカプリ体験であり、このときに出会った Kommunismus のラトヴィア人女性アーシャ・ラツィスが、のちの『一方通行路』の成立に重要な寄与をなしていることは、その献辞に示唆されているとおりである。しかしながら、この「政治的転回」は、実践的な政治参加をめざすものではなく、あくまで市民的知識人としての政治化を意味していたという。このように立論することによって筆者が強調しようとするのは、時間軸に沿った知的な生の展開と交差するかにみえる、作品としての『一方通行路』を形づくっている原理であるところの空間的、「建築的構成」にはほかならない。筆者は、ベルント・ヴィッテに依拠しつつ、六十のアフォーリズムから成るこの書が、そのままひとつの「街路=テキスト」であり、さながら街路の両側であるかのように、前半と後半のアフォーリズム群が相互に照応していることに着目する。かくして、この「街路」が「公的に政治的な空間、自由な言論空間」として構想されている一方で、こうした寓意的な構成に看取される批評性が、その一見して機能的、実用的な様相にもかかわらず、初期の諸論考において表明されていた哲学的批評性に連続していることが確認されるにいたる。そして、筆者は、献辞においてラツィスに擬するところの「技師」の寓意を、ロシア・アヴァンギャルド運動に関連させつつ、やがては Kommunismus を経て政治的アウトサイダーにいたる、ベンヤミンの政治的変身をも予感させるものとして解釈している。

『一方通行路』の暗示的な構成についての知見は、上述のようにならずしも筆者の独創によるものではないが、それを敷衍することによって、ベンヤミンの思想の発展史のなかにこの作品を位置づけることに成功し、かつこれほど総合的に展開しえた論文は、ドイツ語圏においても例をみない。

本論文は、闊達な行文にややもすると上滑りの気配がみられはするものの、参考文献を博搜しつつ、筆者がいうところのベンヤミンの「政治的伝記」を構成しえた力量は、十分に評価されるべきものである。以上に鑑みて、本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に相当するものと判断する。